記念誌 「相中相高百年史」 ”思い出の記 ” より

相中での五年間をふりかえって

中 47 回卒　河西　貞夫 (※1)

戦争酣（たけなわ）の昭和十八年に入学した一年生は、甲乙丙丁の四クラス。私は甲組でクラス主任は、生徒を温かく指導された橋川琢二先生。一年生は二百六名だった。戦闘帽にカーキ色の制服、ゲートルという装いで通学。行事も全校教練や第二師団司令部将校の査閲・入隊する先生や上級生の壮行式・武道大会・行軍・マラソン・勤労奉仕など戦時色の濃いものであった。生徒の弁論大会や宗教家・先輩による講演会もあり、熱弁を振るった上級生の姿や建築家遠藤新 (※2) 氏の講演と芸術家らしい風貌が印象に残っている。

朝礼で「生徒ハ至誠以テ己ヲ尽シ真摯以テ事ニ当ルベシ」に始まる五つの心得綱領を唱え、授業の終始はラッパの合図で行動する等、毎日が緊張の連続であった。教科は、修身・国語・歴史・地理・数学・物象・生物・教練・体操・武道・音楽・書道・図画・工作・外国語・修練で、成績は優・良・可・不可で示された。先生方は予習・復習の大切さを強調され、学習の基本的習慣の育成に努められた。国漢の市村正二先生は「原義は必ず辞典で調べよ」と指示。〈従母〉の意味を〈まま母〉と答えた生徒に、辞典には、〈母の姉妹〉とあることを指摘、市販のトラの巻に頼った安易な学習態度を厳しく注意された。私たちも大いに反省した記憶がある。

二年生のとき、五年生が福島市、三・四年生が京浜地区の工場に学徒動員。学校に残った二年生は、民俗学者岩崎敏夫 (※3) 先生に国漢を学ぶなど、授業は続いていたが、戦局急を告げ、校外に出ての作業が多くなった。

三年生の四月から六月にかけて五十日間、石川町に動員、食糧不足とシラミに悩みながら飛行場づくりに従事し、つらい体験をした。帰校後も田植え・海岸陣地構築などにあけくれて終戦。九月に授業再開、戦時中の教科書と訣別。文芸作品を教材とした授業や、鎌田昌次郎 (※4) 先生の通訳で米軍将校の講話を聞くなどがあった。冬は石炭不足で列車通学ができない生徒のため分校を設置、食糧は窮乏した。

四年生になり、授業や部活動が本格化した。物理やバレーボールを担当された庄司国男 (※5) 先生が私たちを西山の堤へ引率され、歌い、語り合う集いを設けて下さったことを覚えている。東京方面から転入生たちの活躍が大きな刺激になったこと、戦争中も自習に励んでいた人たちが、四年終了で見事に第二高等学校や私大予科に合格したことを特記したい。

五年生になり、将来を想う日々をすごしたが、学制改革が迫り第四十七回卒業生として去るか、新制高校三年に編入し、相高第一回卒業生になるか選択し分かれた。

しかし、国公立大や旧高専・私立大に百余名が進学、各界での活躍を実現した。人の世の常、生徒に嫌われた先生や好ましくない生徒の存在もあったが、良き師・良き友に恵まれた人生の学び舎相中での日々を懐かしむ昨今である。

（※1）昭和 23（1948）年卒　中村出身

（※2）明治 41（1908）年卒　福田出身

（※3）昭和２（1927）年卒　中村出身（昭和 19(1944)年～昭和 31(1956)年まで、相馬中学・相馬高校教諭）

（※4）大正５（1916）年卒　中村出身〈大正 9(1920)年～昭和 32(1957)年まで、相馬中学・相馬高校教諭〉

（※5）昭和９（1934）年卒　中村出身〈昭和 20(1945)年～昭和 32(1957)年まで、相馬中学・相馬高校教諭〉

（転記　村山）